

福沢諭吉『学問のすすめ』における「文明」と自然
～近代化と湿地・自然に関連する東アジアの伝統～

○笹川孝一 (法政大学)

sskoichi@hosei.ac.jp

「近代化」と湿地・自然の破壊と再生

一般に「近代化」が湿地・自然の破壊を進めたとされるが、次の要素を含む「近代化」のすべてが破壊を促したとは、言えない。①動力・エネルギー革命と自動生産システム。②大量生産、大量消費社会。③市場経済の全地球化。④大規模な戦争や軍需施設。⑤個人契約社会を基盤とする新しい共同社会の創造。⑥これらを実行するための、文字記号・リテラシー社会。

たしかに次のことは湿地・自然破壊を促進した。①エネルギーのための石炭・石油、機械素材としての金属等の行き過ぎた採掘や原子力開発。②過度な生産と大量のごみ、排気ガス、汚水。③商業主義による破壊の加速。④軍事施設・演習、生物化学兵器の開発・使用。⑤地縁血縁共同体の弱体化と新しい社会の未成熟、無縁化による、湿地・自然の従来型管理システムの崩壊。⑥湿地・自然よりも工業の方が富をもたらすという一面的リテラシー内容の注入。

しかし「近代化」がすべて、湿地・自然破壊をもたらしたのではない。近代化は、①人間を過酷な肉体労働から解放し、②飢えや寒さを減らし、③世界全体のモノや情報、人の交流を盛んにした。また、④人間の身体破壊も含む大規模な自然破壊である戦争への反省から、国民国家を超えた国際的な理解・協力の枠組みやSDGs等の目標を作り出し、⑥権威的な文字記号の使い方を克服しようと、水平的で自己表現を交流しあう文字記号の使い方を促してきた。

そして今、近代化の正の遺産を拡大・深化し負の遺産を縮小して、「湿地・自然の一部としての人間」と「人間が係わった自然」との両立を求めて、実践的・理論的探究を行っている。

福沢諭吉『学問のすすめ』における「文明」と「独立」

日本の近代化をリードした書物として福澤諭吉の『学問のすすめ』がある。福澤は、一人一人の精神の独立を基盤として、職業人・人民・国民として互いに協力し合う「人間交際(society)」 「文明」の「本」とし、工業や学校、病院、議会、国家の独立を「末に咲いた花」とした。彼は、人間は「天地の間」にあるものを活用して自分たちの便利を達する存在と考えたが、「物」は必要なだけあればよく、「物に制せられる」ことをよくないとした。また日本の工業化を進むには、座繰り糸の改良や酒造りなどの地場産業を育てることが大事だとして、職人の技と学者の技との協力による新しい知識・技・智慧の創造することが不可欠だとした。

このように日本の近代化の初期、無分別な工業化や大量消費はむしろ批判されていたことは注目される。その背景には、水をキーワードとする『老子』などの東アジアの「道」=宇宙の摂理と「徳」=道を踏まえた人の生き方の技・知識・智慧があった。

キーワード：近代化、自然、湿地、福澤諭吉、学問のすすめ、文明、天地、老子